

古代成立期に於ける国家と經濟

木 下 偉 十

(1) は し が き

国家は法律学特に国法学に於て大きく論究されている。その他社会学の研究対象ともされている。然し経済学の部門に於ても国家は可成り古くから問題とされて来た。寧ろ経済学は国家的なるものを捨象することによつて始まつたということも出来る。国家に対立するものとして経済社会が組織されて始めて経済学は成立したのであるから。政治的には十八世紀中期西欧諸国に個人の自由を特質とする市民社会の独立が意識されてから経済学は起つたのである。以来経済学に於て国家を取上げる時はそれを経済社会の攪乱者として説明するか又は後見者として臨時に思い出す程度のものであつた。そしてそれは経済学としては当然のことであつた。経済学は経済社会の法則を考究するものであるからである。そのためには経済社会の自然的秩序を確立することが必要であつたからである。経済学説史を概括して重農主義のケネー⁽¹⁾ 古典派自由主義のアダム・スミス⁽²⁾ 純粹経済学派及少しく意味合いを異にするがマルクス経済学は何れも国家を排除否定するものであつた。アダム・スミスの自由主義経済学に対抗して主張された独逸の歴史学派は国家に対して肯定的であつた。そして第一次世界大戦後高度資本主義時代に入ると英国のトマス・グリーン⁽³⁾ やケインズ⁽⁴⁾ の経済学は経済社会の跛行を修正するものとして国家の作用を要請するのである。然し国家を経済学に取り入れようとする時もそれは経済学の認識理論としてではなく政策学としての立場によつて論ぜられているに過ぎない。所が現実の社会に於ては、近時第一次世界大戦後世界の平和を確立しようとして国際經濟の調整が現代資本主義の問題となつている。また国内的には經濟に対する国家の作用が益々増加しつつある傾向が見られる。尚最近我国に於ても愛国心の問題に関連してナショナリズムを如何に概念構成するかが新しい意義を持ちつつある。このように見て来ると国家と經濟との關係は改めて考究しなすなければならないのではなからうか。「国家」と「經濟」とは融合することのない対立概念であるのか。

- (1) Francois Quesnay
- (2) Adam Smith
- (3) thomas Hill Green
- (4) John Maynard Keynes

「国家」はあくまでも「經濟」のアウトサイダーの性格しか持たないものであろうか。この両者の關係を根本的に考へて見る必要を感じるのである。この両者の關係が問題として意識されたのは勿論十八世紀近世のことである。然しこの問題の考究は古代のむかしに遡つて始めなければならないのである。「国家」も「經濟」も人類の歴史とともに存在していたからである。

(2) 国家生活の起源

およそ人間の歴史に於て国家は如何にして生じたか。先史時代の原始社会は未だ組織の薄弱な不安定なものであつたことは容易に想定される。それが政治的に国家としての性格をもつたのは如何にしてであらうか。これに関して古来幾多の説がある。社会学に於ては人間の社会生活の進化の段階を三つに分けて説明されている。英国の社会学者ブエイヂホツト⁽¹⁾ は(1)習俗時代(2)斗争時代(3)討論時代と區別して、そのオーの斗争時代の段階に於て国家の發生が見られるといつている。これと同様なことは、かのスペンサー⁽²⁾ によつても説明されている。彼は(1)種族時代(2)軍事時代(3)産業時代の三つとし矢張りオーの軍事時代に国家の起源を置くのである。その他ギディングス⁽³⁾ やホツプハウス⁽⁴⁾ の説にも同趣旨のことが見られる。

以上の説によつても先ず国家という社会生活形態の前には種族を基底とする氏族社会があつたことが考えられるのである。そこに於ては血縁關係や共同生活による近親感が団体結成の要因であつた。そしてそれが發展して行く過程に国家の成立が起るのである。こゝに於てはその国家成立の要因が斗争や戦争であることで前の段階と明らかに區別されるのである。この様に国家成立の起源を斗争に求める学説は多くの学者によつて主張されている。古くはマキアベリー・ボーダン・ホツプス・ヒューム⁽⁵⁾ 等がそれである。更にそれはグアンプロウイツク・

- (1) Walter Bagehot: *Physics and Politics*
- (2) Herbert Spencer. *Principles of Sociolgy*
- (3) Franklin Henry Giddings: *The principles of Sociology* (1886)
- (4) L. T. Hobhouse: *Social Evolution*(1911)
- (5) Niccolo Machiavelli: Jean Bodin: Thomas Hobbes: David Hume.

ラッテンホツプアー・オツペンハイマー⁽⁶⁾等によつて受けつがれ整えられた。その中最も特徴のあるのはグアンブロウィツクの説である。それによると原始氏族社会は近親感によつて結ばれ、比較的平和な生活であつたが次第に種々の集団の間に利害関係の対立が生じて来た。それが大きくなつて斗争にまで発展して行くのである。そして勝者は敗者を服従せしめて自己の支配状態を確立維持しようとする時に国家は成立するとするのである。そしてその時国家には必然的に異種民族が混入することとなりそれがまた融合されるとするのである。その起源に於て異種民族の混淆がなくて国家の起つたものはないとさえ彼は極言している。このことは歴史学の泰斗ランケ⁽⁷⁾の次の言葉を想起させる。「地上には他の民族と無関係ですまされるような民族は一つもない」また同じく歴史哲学の部門にある我国の高坂博士⁽⁸⁾はその著「歴史的世界」の中で次の様に述べている。「戦争は国家にとつて本質的である。…… 少くとも過去に於て戦争は国家の成立及存立にとつて必然的であつた。けだし戦争を通じてのみ民族は国家としてその主体性を自覚し且保持したが故である」以上の国家斗争説の様に国家の起源を斗争にのみ限定するのは極端であるとして反対の説をもつ学者も勿論可成見られる。コント・ハイエス・クロボトキン⁽⁹⁾等がそうであり、最近では米国の人類学者モンタギュー⁽¹⁰⁾がそれである。何れも斗争の外に人間の社交性や協力性も国家成立の要因として指摘している。特に社会内部の問題—経係生活、家庭生活、宗教的祭事等の規律保持が国家の成立をうながしたとしているのである。国家斗争説が人間の社会形成の競争性を強調したのに対し此等の平和的な成立要素を主張する学説は人間の協調性を強調したものと云うことが出来る。また斗争説が外部の異種民族を吸収して国家を形成する過程の面に焦点を当るのに対し平和説は国家形成後の内部の団結維持の面に焦点を当てたものと云うことが出来るであらう。これに関して社会学者サムナー⁽¹¹⁾の内的団体間係と外的団体関係⁽¹²⁾の説を参考とすべきではなからうか。即ち前者が平和と秩序とを特徴とするのに対し後者は敵愾と憎悪とを特徴としていると云うのである。斗争説はサム

ナーの外的団体関係に基く人間性を見るものであり平和説は内的団体関係の人間性を見るものと云うことが出来るであらう。従つて古代国家の成立が夫々の種族を異にする氏族集団が合併し吸収されたものであり、それが前国家社会形態と本質的に区別される可き点であるならば斗争説の方がより妥当性をもつものと云われまいであらうか。然し両者何れも国家の有つ二つの面を夫々説明するものとして尊重しなければならない。

先づ斗争説が主題としている戦争は如何にして為されたかを問題としなければならない。戦争は一個人の恣意的な征服欲支配欲によつてなされるのであろうか。偶然的に武力を把握した大王や勇将の個人的一方的な勇猛果敢な行為によつて始まるものであろうか。古代の戦争が小規模であるとしてもそれが集団行動である以上は、また効果的であるためには一個人の意思のみで為し得るものではないであらう。夫々の種族や民族の心の奥に潜在する民族意思を喚起しそれを具現する意味を持つて始めて大王や勇将の戦争指導が可能となるのである。然し民族意思はすでに出来上つた確定したのものとして大王や勇将に呈示される様なものではない。ヘーゲル⁽¹³⁾の言葉をかりるならば民族は「自ら何を欲するかを知らないのである」それが個々の大王、大帝の企画心の中に普遍性をもつて表現される時民族意思が形成されるのである。この云はゞ原始的にして素朴な民族の心を説明するものとして歴史学者コオール⁽¹⁴⁾の次の言葉は示唆に富んでいる。即ち「人間は常にその環境と位置を変化し改良しようとする社会的にして且つ不安定な存在なのである」戦争の原因を一義的に決めることは不可能であらう。現実には種々の原因が複雑に入り組んで起されるものであろう。社会学に於て財産の掠奪、荣誉と卓越への欲求などと挙げられる原因の中で特に一般的で強いものとして経済的条件を強張していることは注意しなければならない。人口の増加によつて領土の拡張を求めたり生活水準の向上への意欲が生活資財の増大を求めたりすることがそれである。人口の増加や道具の発達によつて人間の行動範囲即ち生活圏が拡大すると集団を異にする夫々の種族が互に接触を始めることは容易に想像出来ることである。これらの種族の関係は外部集団関係⁽¹⁵⁾として敵対心の強いものである。従つてそこに於ける交渉はどうしても武力による斗争の形をとらなければならなかつたのである。古代に於ては種族は戦争によつて始めて相互を認識したのである。戦争がなければ他種族を知る機会はなかつたとさえいふことが出来る。戦争は破壊的なも

(6) Ludwig Gumplowicz, Gustav Ratzenhofer, Franz Oppenheimer,

(7) Leopold von Ranke.

(8) 高坂正顕氏

(9) Aupuste Comte, E. C. Hayes, Peter Kropotkin

(10) M. F. Ashley Montagu,

(11) William Graham Sumner: Folkways (1906)

(12) In-group, Out-group

(13) W. F. Hegel

(14) Kohl

(15) Out-group

のではあるが確かにまた建設的な効果をもたらすものでもあつたのである。このことを具体的に説明するものとしてミイラー⁽¹⁶⁾の「国家征服説」がある。狩猟種族の一族が経済生活の様式を異にする農耕種族を武力によつて征服することによつて国家は成立したとするのである。そしてそれは人口の増大により家畜の営みが発達しその飼料の原料資源の獲得のためであつたというのである。経済条件の変化が国家成立の動機となつていることに注意しなければならない。人間の生活集団が未だ政治的に国家の形態をとらなかつた時期のあることは前記社会学の三段階によつて述べられている通りであろう。その段階の社会は経済的生産力が狩猟や植物の採取という低い状態（食糧採集経済）にあつたから小規模な原始共同体で有り得たのである。然し経済生活の発達はその様な社会形態を変えさせなければならなかつたのである。道具も石器、青銅から更に鉄器に変化進歩すると生産様式も農耕という食糧生産経済に発達していつたのである。農耕器具の発達によつて農産物に余剰が出来ることとなつた。その余剰物の交換の一つの方法として戦争が行なわれたのである。古代に於ては戦争は交易行為であるとも云われる。或はまた生産行為ですらあつたのである。道具の進歩は武器の面にも現われそれだけ軍事力の増大が生じ古代人の戦争への意欲を高めたとも考えられる。一層戦争による征服欲は激化されたであろう。然し戦争の原因に経済的なものが強く働いている場合、勝者が敗者の生命を奪う代りにそれを経済的に利用することが有利であることを知るのは当然である。当時進歩したとはいへ未だ幼稚であつた道具の生産力を補うために多くの人力が必要であつた。戦争はまた奴隷と云う労働力の獲得の目的をもつたのである。それもまた経済条件の変化によつて要請されたものであることに注意しなければならない。

最後にマルクス主義の国家論としての「国家階級説」も考えて見なければならぬが、これは国家成立の起源よりは寧ろ国家の内容の本質を説くものである。又国家斗争説の形を変えたものとも考えられるので次の国家内部の問題の項で取上ることとする。

(3) 経済生活の組織

経済という人間生活の領域は多くの人々の物質生活の秩序の安定を条件とするものである。単に個々の人間の外界物獲得の行為があつてもそれは未だ正しい意味に於て経済行為とは云えないのである。それが他の人々の行為と交錯して一つの秩序の下に組織を結成してこそ経済の領域が形式されるのである。そしてこの秩序の確立に

は対外的な力と同時にその社会内部への力も必要である。結局経済も人間の社会行動である以上他の政治、教育、宗教、娯楽と同様に一つの組織をもつた制度とならなければならないのである。人間が物質生活上の欲望を満足しているうちに自づとそれらの行為が一つの纏りをもつて来る。更に他の多くの人々と交渉を広く持つことによつてそれらの行為が洗練されて社会全般に行きわたり幾種類かの習俗となつて確立される時経済制度が成立するのである。人間が集団生活に於て生活行動をとるとき個人的なものは現実的効果が薄い。社会一般の集団の傾向に従つてこそ効果的であるからである。従つて社会学に於てもすべての制度はその社会の人々の要求によつて生じ又その要求を満足して維持されて行くと言ふのが通説である。かくして制度が社会の人々の行動の基準となつてそれが確立されると反面人々の行動を規律し統制する力を持つて来なければならない。経済が一定の秩序を前提とすると云う時当然規律性、規範性が考えられなければならない、規律のない所には秩序は生まれぬからである。事実経済生活の規律は人間生活の始めより行なわれて来たのである。経済生活の組織を考えて来てその規律性の問題に相對する時前項目の国家成立の起源に関する平和説にもう一度歸り行かねばならない。経済組織が国家成立後の内部的關係であり平和説は寧ろその方面により妥当性を持つているからである。人々が衣食住の安定した生活を求めて経済組織を形成する時自づから自己の私的な欲望を抑制し個人的な利益を集団の利益のために犠牲にしなければならない。そのことが公共心や道徳心の様な他人との協調關係によつて為される場合もあろう。然し又何かの力によつて強制的に為される場合もあることが考えられる。その様なことは何所に求め得られるであろうか。それは国家を除いては考えられなかつたのである。そこに国家成立の原因を見ようとするのが上記平和説であつたのである。その成員をして協調心を發揮せしめるが如き精神的基礎を与え、時には強い支配力を發揮する特別なものとして国家は形成されたのである。特に国家のこの支配力は如何なるものであり又如何にして生じて来るものであろうか。自由放任を主張して自由主義経済を説くアダム・スミスも経済社会の秩序や規律を否定したのではなかつた。唯その規範力、強制力を具体的な人間の手にゆだねることを否定したのである。経済社会自身の自律を予定したのである。「見えざる手」と云う表現は寧ろ個々の人間に向けられた力の必要を否定しつゝ肯定しているということは出来ないだらうか。こうした観念的な自然法的根拠は素朴な古代人の理解し得ることではなかつた。もつと直接的で具体的ななければならない。従つて経済秩序を守る規範力の源は古代社会に於てはどうしても宗教的武力的尊嚴を備

(16) J. Miliar: The Congest theory

えて現実に存在するものに求めなければならなかつたのである。それは国家をのぞいては考えられなかつた。国家のもつ強い規範力、強制力を特に武力に基礎づけようとするのが前記国家斗争説である。国家といえは高権を以つて支配する状態が何れの時代に於ても何れの組織をもつてもその共通な本質として要請される。従つて先づ或る者が他の者を征服し隷属せしめることが考えられるのである。国家は一が他をその意思に反して抑圧し服従させる所に成立するというのである。勿論国家には統治支配ということがなければならぬ。そのために国家は民衆を統制する政治上の一定の力を持つている。この様な主権をもたない国家支配権を持たない国家は考えられないのである。戦争による勝敗は支配者と被支配者とを容易に簡単に区別することが出来る。斗争説は国家の主権の発生する根拠をそこに見出すのである。然しこうした支配力は武力という一つの暴力によつてのみ生じるものであろうか。また斗争説の主張する様なことは外部的な異種民族の間で見られることであつて同一民族内部の高権力は如何にして生じるのであろうか。この問題を説明しようとするものにマルクス主義の国家階級説がある。生産手段を支配する集団が他を搾取する状態を強権力を以て維持しようとするのが国家であるとするのである。国家は超階級的性格のものではあり得ない。支配階級の国家であり本質的に被圧迫階級、被搾取階級に対する抑圧機関であり搾取機関であり階級支配のための用具であるというのである。権力の発生を探究しようとするのではなく、寧ろ現存する国家の目的と内容を説明しようとするものといえる。唯そこに階級と階級との斗争が説かれているのは形を変えた斗争説として注意しなければならない。或る一つの集団が生活関係に於て何等かの共通の利益を得ていてそれをその集団にのみ独占して来る時階級が生じるのである。経済社会自身の本質としては自由競争を建前として需要供給の均衡のとれた取引が行なわれ適切な犠牲に対して適切な報酬が与えられることを予期している。然し完全なる自由競争ということは現実の社会生活には求め得ないことである。逆にいえば或る程度の独占が存在することが経済社会の現実である。まして「閉ざされた社会⁽¹⁾」の状態にある古代社会に於ては経済活動の条件は千差万別であつたということが出来る。競争者の間には他より有利な優先的な位置にあるものが必ず存在するのである。この様な差別は如何にして生じるのであろうか。元来人間の社会には平面的な平等無差別は有り得ないのである。それは自然的にも身体的にも人間は夫々差別をもつて生れて来たのであ

(1) Societe close: Bergson; Les deux sources de la morale et de la religion

るからである。その差別が社会内部の集団の間に見られる様になるとそこに身分や階級が生じて来る。自然的な差別が社会的差別に変容するのである。或る集団が他の集団と異つた権利特権を持つたり、或る集団が他の集団よりも上の社会的地位にあると考えたりすることである。そしてそれが社会の中に一定の組織を構成するのである。それでは、この様な差別の社会層は如何にして生じるのであろうか。これについては国家の起源の場合と同様なことがいわれている。オツペンハイマー、グアムプロヴィク⁽²⁾は階級を生んだものは斗争であるというのである。前記のミイラーの国家征服説も階級の起源に関する著書の中に於てなされているのである。階級発生に関する探究は国家発生の問題に帰行するのである。国家の発生と階級の発生は人間の歴史に於て同時であつたからであらうか。国家と階級とは表裏一体の関係にあるのであろうか。その他デュリングフアイヤカント⁽³⁾の権力説、暴力説も同じ趣旨を説くものである。

勿論これに反対する説もある。ソロキン⁽⁴⁾は斗争は階級の成立を助けるものではあるが、根源的にそれを発生させたものではないとするのである。階級の成立は主として個人的な資質の差異や個人の環境の相違によるものであるといつている。キューバーやケンケル⁽⁵⁾は階級は個人や家が夫々の持つている威光、特権及力に従つて形作られた組織であるといつている。次にこうした威光や権利の相違は如何にして出来たかが問題となる。それは確かに個人個人の先天的能力の相違や後天的な条件の相違もあると云える。或はまた職業上の経済的技術や戦斗力、宗教的感知力にすぐれている者が自づから他を指導するようになる。それが固定して一定の集団に独占されるとそこに身分という特殊の力が生じて来る。この身分の力によつて更に土地や家畜の支配力を拡張して益々政治的勢力が作り上げられるのである。又最後には戦争に於ける功績が国家内部にも権威を光らして上級の地位を占めることも否定出来ないことであらう。

然しこゝで注意すべきことは今日の階級論が何れも経済生活上の原因を挙げていることである。職業上の対立を説くシュモラー⁽⁶⁾、経済組織上の共同の利害関係とその対立を説くゾンバルト⁽⁷⁾ 財産及富の差等を説くピュセ

(2) Franz Oppenheimer, System der Soziologie (1922)

Ludwig Gumplowicz, Rassenkampf (355)

(3) Karl Eugen Dühring, Alfred Vierkandt

(4) Pitrim A. Sorokin

(5) John F. Cuber, William F. Kenkel

(6) Gustav von Schmoller

(7) Werner Sombart

ヤー⁽⁸⁾ シュタイン⁽⁹⁾そしてマルクス主義として搾取関係を説くカウツキー⁽¹⁰⁾ 生産関係または生産過程に於ける地位の同一及対立を説くブハーリン⁽¹¹⁾ などがそれぞれである。

以上をまとめて見ると先づ経済生活は一つの社会制度として存在する。そして一定の秩序の下に行なわれる。従つて個人を支配し規律する力が伴わなければならない。そのためには当然国家が要請される。その力は対外関係的には戦争によつて発生する。その戦争も前項で述べた如く経済生活の過程の中に発生したものである。次に対内関係に於てその力の発現母胎となるものは階級である。そしてその階級も国家に必然的に見られる組織であつて、これも経済生活の過程の中に発生したものである。こゝでレーニン⁽¹²⁾ の次の言葉を参考にしなければならない。その結論はマルクス主義の当然の帰結として国家の否定ではあるが、「国家はけつして外部から社会に強制された権力ではない。同様にまた国家はヘーゲルの主張するように道徳的理念の現実性でも理性の映像及現実性でもない。国家は寧ろ一定の発展段階に於ける社会の産物である」従つて経済生活を考える時、古代社会に於ては国家を考えなければならないのである。国家と経済とはその発生を同じくするのである。

次に今迄述べて来たことをギリシヤ、ローマ等の都市国家について更に考えて見たい。先づそれらの国家の特徴として城壁を周囲に設け軍事的要塞としての地理的条件を備えた段丘の上に位置を占めていることである。城壁は古代国家の象徴である。これは必ずしも最初から単に侵略的、好戦的意図に出たものではない。比喩的に云つて星雲状態とも云われる様に変転して捕捉し難い諸種族の動向は互に恐怖と敵視の不安定ないくつもの渦をなしていたと考えられる。そうした中に一つの安定した秩序を形成しようとする外敵異民族からの侵入攪乱を防ぐことが緊急のことであつた。城壁は国家の本質である秩序の象徴であつた。そしてまたその内にあつて経済社会はその場を見出し得たのである。軍事的施設をもつた城壁は外的関係としては戦争が国家成立の要因であつたことをも表現している。アテナイの丘陵に聳えるアクropolis⁽¹³⁾ は外部に対してはその主体性と威光を誇り内部に対してはその主権と權威を示していたものと想像され

るのである。そしてギリシヤの二つの大きな都市国家アテナイとスパルタとを比較して考える時前者が平和説的であるのに対して後者は斗争説的であるのは興味深いことである。これらの都市国家が成立するまでにはアカイヤ、イオニアそしてドーリアという異種族の接触斗争があつたであろう。スパルタはそのドーリア族がアカイヤ族を征服して成立したのである。従つてその征服者達が集つて支配階級を結成して被征服者のアカイヤ族を奴隷階級として生産の用に使つたのである。アテナイはその前の氏族共同体の発展的解体の過程にあつて何らかの指導力によつて土地を集中増大させたものが生じて来た。それが集つて貴族階級を結成して支配権を握りその企画に基いて国家は構成されたのである。従つて他に商工業者階級や農民階級が附合されたのである。この場合建設者の意図には経済的条件の変化に即応した高次の社会形態の結成が見られるのである。そしてその国家が「都市国家」と呼ばれ都市の性格を持つていたことは意味深いことである。都市とは人間生活の合理化された型であるからである。「都市国家」と云う語は古代社会に於ては経済と国家が同一であつたことを暗示していると云えないだろうか。然しこのことを解明するためには更に経済関係の他の特質について考えて見なければならない。秩序について経済関係の本質的な指導原理は所謂経済原則といわれる合理性の追求である。最少の犠牲によつて最大の満足を得ようとするのである。それによつて経済は成長し人間の福利は増進するのである。合理性というのは自然に対立して人間の生活が始つたことを意味する。自然にまかせることには人間の主体性は見られない。従つて真の経済生活ではない。自然を一次的に本能的に利用することは動物の爲していることである。自然より発して自然を人間の計画と目的とに従つて利用するのが合理性の出発である。

そこに人間の経済という文化行為が見られるのである。それは先づ人間による道具の作製から始まる。これについて高坂博士は次の様に述べている。「もはや植物でも動物でもなく鉱物が即ちそれ自身としては生命なきものが人間によつて始めて独立的な活動を営むに到つて血は土から独立するのである。けだし人間の生命が自ら自然の外に才二の自然を造り得るに到つて自然からの人間の独立は疑い得ざるものとなるからである。……それを人間の道具、器具、機械が教えるであろう⁽¹⁴⁾。」人間は理性的社会的であると同時に道具を作るものとして動物と区別されるのである。道具の発達については前項に於てそれが如何に経済生活の発展を促がしたか、また延いては国家の成立に如何に関係したかを述べたのでこゝ

(8) Karl Bucher

(9) Ludwig Stein: Einführung in die Soziologie (1921)

(10) Karl Johann Kautsky

(11) Nikolai Ivanovich Bukharin

(12) Vladimir Llich Lenin

(13) accropolis

(14) 歴史的世界、昭17. 8. 30 203頁

での詳論は避けることとする。道具の発達によつて生産の規模が拡大して来ると次に労働による生産方法の合理化が進んで来る。即ち生産力の増大の結果自給自足より分業の発生を見ることとなる。その経済的職能の分化に伴つて古代の氏族制度はより高次のものへ変らなければならなかつたのである。ブエヒャー⁽¹⁵⁾は古代社会に於ける分業の発達段階についてそれが社会の形成について影響する所を次の様に述べている。「合力の二形式は社会の集団構成の手段となるものにして社会的隷属関係を作り出し之を維持するのである。…合力にせよ又連力にせよ多数者が共働することは要するに道具の不完全なるに対して労働任務の大なることに基いている。而して其の労働任務が恒久的性質のものなるか。それ程までなくても一経済範囲に再々反復せらるゝ如きものなるときはそれを確実に維持せんが為め茲に或る統治権力によつて確保せられる恒久的な社会集団構成を促がすに至るものである」先に国家の内的な権力の発生の経路として階級を考えたがこの階級はまた分業の結果としても生じるものであることを教えている。またプラントは分業を論じて生産力の増大への効果を述べて更に国家の基礎としての意味を述べている。国家の原始的の基礎としてまず物をあげそして衣食住に対する物的欲求は人間の共同的行为によらなければ充分に満足することが出来ないといっている。即ち分業が国家の結成に経済的行為を通して働きかけていることを述べているのである。ギリシヤの都市国家に於てはすでに農耕器具の発達により食糧の余剰物が生じ、またそれによつて直接食糧の生産に従事することなく工業、運送、商業などを仕事とする様な職業上の分業が見られるのである。上の如く分業が発達して来ると社会構成に変化が生じることとなる。経済的職能が複雑に分化して来るとそれまでの氏族社会の形態では不十分な面が出来て来たのである。これらの前国家的社会に於ては自然発生的な血縁一人間の主体性にとつてはあくまでも才一次的与件として自然一をその構成の基盤としているのである。それが経済生活上の目的追求のための作為が働き合理化が進んで来る。自然に対し人間の否定が為されるということも出来る。血縁を紐帯とした人間関係とは異つた新たな人間関係が作り出されなければならないこととなるのである。この様に自然を人間が意識的に変造しようとする所に国家は始まるとは云えないであろうか。かくして経済生活は未だ幼稚ではあるが前段階より合理化されたことになる。このことをギリシヤの氏族社会について見ると血縁的性格が強く所謂「家族」⁽¹⁶⁾を主体とした農耕社会であつた。しかしこのギ

リシヤの古代社会も経済的分業、特に職業上の分業の必要にせまられて次々と住居の移動が行われることとなつた。かくして種族の分布の変動と混血とが相当広い範囲にわたつて達成するとこの社会の性格は血縁的なるものを脱皮して漸く地域を主体とする地縁的なるものに変らざるを得なかつたのである。当時の経済生活の大いなる要素とも云われる土地、或は又経済活動の「場」を紐帯として地縁関係は結合されるのである。それはより一層自然的な非合理的与件を離れて経済的には合理的合目的な組織となつたのである。国家斗争説は外的関係の集団の接触を説明するものとしたが、経済生活の発展過程には当然血を異にする種族の接触が見られるのである。このことは国家と経済の関係の一体的であることを表現しているとは云えないであろうか。そのことを更にギリシヤ、ローマの「都市国家」の成立について考えて見よう。アテナイ、ローマ等の都市国家即ちポリス⁽¹⁷⁾の成立が「集住」⁽¹⁸⁾の形式によつて為されたことは歴史学の定説である。即ち一定の同じ目的をもつものが人為的意識的に集り来ることによつて為されたとするのである。自然的、一次的環境としての郷土を離れて合目的な位置の選択が行われたのである。軍事的要塞としての地理的条件を備えた高地にポリスは位置を占めてたのである。軍備という一つの目的に従つて土地が選択され施設が構築されたことは都市国家は人間の意識的合目的行為によつて構成されたものであることを強く表わしている。また軍事的目的だけが都市国家成立の要因であつたのではない。分化して来た商工業、農業という経済的職能の為めの立地条件も備えていたのである。アテナイのポリスは商工業者が内部に位置を占め城壁の外部の周囲には農村が按配されていたと云われている。農業と商工業との経済的相互関係の適合の意図も見られるのである。また分業の発達是他面に於ては生産と消費の分離である。それが人口の増加と相俟つて一部に於てはギリシヤの社会に生産と消費の不均衡も見られる様になつたのである。具体的に云えば食糧の不足が生じて来た。そのため主要穀物を他より輸入することが大きな関心事となつて来た。その目的のために黒海及地中海沿岸各地に多数の植民地の設定も為されていたのである。此の如き経済的構図によつて設計されたのがポリスであつたのである。次に注目すべきことは此の都市国家の中心がアクロポリス⁽¹⁹⁾とアゴラ⁽²⁰⁾との二つに分れていたことである。この二つの分立は国家の本質を象徴したものと云え

(15) Karl Bucher, Die Entstehung der Volkshaft, 権田保之助訳

(16) Oikos

(17) Polis

(18) Synoikismos

(19) acropolis

(20) agora

ないであろうが、軍事と政治の中心と経済と言論の中心との分離、結合関係が実に何時の時代にも変らぬ国家の実相であるからである。勿論ポリスの重点はアクロポリスの方に置かれていたかも知れない。然し古代の社会の如き武力的、宗教的色彩の強い時代にあつて一方に於てアゴラという中心を忘れなかつたことは意味の深いことである。このことについての詳論は次の項に於ての問題となるであろう。経済生活の本質を追いながら論を進めたこの項の結論として次のことが云えるのである。即ち、古代社会に於て経済という人間生活の領域が生じるためには必然的に国家の成立が要請されたのである。言葉を換えていえば経済は国家の誕生と時を同じくしているのである。その出発に於ては国家はけつして経済外的なるものではなかつたのである。

(4) 国家と経済との対立

国家と経済との一体性を種々の点より考察して来たが元来人間が社会的結合体を構成するのは唯単に経済的目的のために為されるのではない。経済的合理的判断の結果によつてのみ為されるのではない。原始社会一前国家社会形態については特にそうである。人間の歴史の母胎はあくまでも「母なる大地」である。そこに育かれた種と血の発展が歴史である。原始人が互に大自然と戦いながら共に生活している間に自づから盲目的な親和の感情と延いては同胞の意識とが次々に成長して来るのである。それが更に発達して血縁の関係が意識され強固な統一体としての共同社会が形成されるのである。従つてその形成過程は運命的であり前論理的である。国家の形成も亦このような非合理的な反面を蔵していることは否定することは出来ない。それを超克しようとする人間の主体的な努力の中にこそ国家の発生は見られたのであるから。従つて潜在する民族意思の具現として国家が形成され、その主権の歴史的正当性が備つていても又経済の本質としての秩序の維持の意味を持つていても、それは全たき純粹なものとしてそうあるのではない。現実に於ては国家の支配力や權威を強調するために呪術や祭祀の粉飾の衣を纏はなければならなかつたのである。特にその様にして形成された国家の権力の座を占める者の出現の過程については氏族社会の長の場合と同様にその非合理性は一層甚だしい。これについても神意説実力説等が主張されているのを見れば容易に理解出来る所である。ギイディングス⁽¹⁾が古代の経済を神事経済⁽²⁾とよんでいるのはこの意味に於て興味のあることである。即ち経済は秩序を本質とするがそのために權威の力

がなければならぬ。然し古代に於てはその力の行使が非合理的な粉飾の下に為されていたことを物語つてゐる。然しこのことはたゞに古代原始経済にかぎられたことではない。経済の重要な要素である市場が神社、仏閣で開かれたり、宗教的行事のうちを持たれることは後世の経済生活にも見られることである。これは一面に於ては多数の人間の集合の中に需要と供給の適合を求めたと同時に宗教的な權威の下に於て経済秩序が確立して自由な従つて適正な取引が望み得たことを示しているのである。そしてその「神の燈」をかゝげる者が果して合理的な正しきものであつたか否かは疑問である。前記の「国家征服説」や「国家階級説」はこの国家成立の過程に於ける盲目性、そしてまた国家の本質が持つ非合理性を強調して出来たものである。プラトンはその国家論に於て国家の倫理性、知性を説いたが現実のギリシヤ国家は幾多の政治的斗争の結果生じたものであり勢力角逐の炎は絶えずもえていたのである。

以上の如く国家と経済はその成立の起源に於て一体的であつたがその本質に於て必ずしも完全に一致するものではないということが出来る。従つて国家の政治面が持つ非合理性が経済の追求する合理性と相矛盾することも起り得る。国家を非合理的な存在とする説があるのはそれをあらわしている。ホツプス⁽³⁾が国家をリヴァイアサン⁽⁴⁾という「怪獣」にたとえたのは有名である。国家の政治は「殺人の歴史」⁽⁵⁾と見られたり又「屠殺台の光景」⁽⁶⁾といわれもしている。経済はウェーバー⁽⁷⁾によれば収益性を目標とする企業活動の資本計算の形式的合理性を最高度に実現しようとする組織である。然るに国家は一面に於て呪術的な神秘的なカリスマ的⁽⁸⁾な力の行進である。経済の形式一資本の循環過程を無視することも起る。経済は資本計算のためには国家を無視することも起り得る。然し国家は何よりも独立性と權威とを尊重するのである。ケネー、アダムスミス等国家を経済より排除しようとする考えは皆この国家と経済との対立面を強調するものである。国家は経済の自立性を破壊するものとしてその介入を拒否するのである。確に国家は経済を拘束し不自由にしました不公平化し続けている。然しかくの如く経済に対立しそれを否定しようとするものは国家だけではない。経済の原始的基盤である自然ですら経済を否定するものである。古代のオリエントや東洋に於て

(3) Thomas Hobbes

(4) Léviathan (1651)

(5) Georg anton Hugo von Below

(6) Hegel

(7) Max Weber

(8) Charismatische

(1) Franklin Henry Giddings

(2) ceremonial economy

は洪水に対する防禦が国家成立の要因であつた。これは自然が如何に経済の秩序の攪乱者であつたかを物語っている。またその様な条件の下に於ては経済の脅威を取除くことが国家成立の目的であつたのである。国家と経済の一体性を示しているものと云える。経済は本来不自由な拘束された環境、条件を前提としている。「経済財」と「自由財」という経済学の概念の対立によつても理解出来るように完全に自由な環境、神の樂園の如き所には経済ということは考えられないのである。経済はそれに対立する自然的環境、社会的環境を否定してこそその主体性と現実性を獲得するのである。かゝるものは否定的に媒介されて経済財となり経済組織となるのである。内外両面の障壁を切りぬけて合理の道を開いて行くことが経済の進歩発展となるのである。従つて国家が経済を妨害する動きを見せることがあつても、それを以つて直ちに経済と国家とは相容れない無縁なものとするのは果して正しいか疑わざるを得ないのである。ペエロウは人間の歴史と国家の関係の必要性を主張している。又トライチケ⁹⁾は「国家より遠ざかれば遠ざかるだけそれだけ人は歴史的生活より遠ざかるのである」と述べている。国家はあくまで人間の歴史的社会的自然的基盤、種の生命の母胎として動かすことの出来ない力を持つてゐるのである。ランケは「国家は神の息吹にして且人間の衝動である」といつている。悪を為すと同時に善をも為し得るのである。プラトンはポリスを以つて「巨大な人間¹⁰⁾」としてその勇氣とともに理性の持主であることをたゞえている。再び眼をギリシヤの都市国家に向けて見よう。前記の様にアテナイのアクロポリスが政治軍事の中心として云わば非合理性を表現するものであるのに対してアゴラが経済的取引や市民集合の中心として云わば合理性を表現するものであつたことを忘れてはならないのである。特に経済と集会とが同一場所に置かれていたことに注意しなければならない。市民はアゴラに集合して経済行為を取り交わすと同時に経済的な合理化のための市民の側からする行動の根拠としたのである。「都市は自由な空気を作る」という言葉がいわれているがこれはとりもなおさずこのことを現わしたものである。この自由とは政治の非合理性に経済の合理性が抑圧されないことを意味しているのである。アテナイでは三十才以上のすべての市民がアゴラに集合して「500人会議といわれる人民会議や人民法廷を開いたとされている。それによつて徹底した直接民主政が成立していたのである。結局古代のギリシヤに於ては国家と経済とが相互に働きかけながら融合し、それによつて国家も繁栄していたことを示

(9) Jreitscke

(10) Makroanthropos

すものである。これについて歴史学の部門に於ても次の様なことが云われている。シュタイン¹¹⁾「人間の共同生活の内容は国家と社会、社会と国家の絶えざる斗争でなければならない」シュライエルマツヘル¹²⁾「国家の生命は社会との相互作用にある」トライチケ「国家形態は社会と決して完全に一致するものではない。もし一致すればあらゆる歴史的運動は停止するであろう」国家と対立する文化の領域は経済以外にも幾多考えられるし又社会現象も敢えて経済だけに限られるものではない。然し新しい発展を求めて合理性を追求する自由への流れは経済を泉としているとは云えないであろうか。ギリシヤの都市国家に於てアゴラに経済市場と人民会議とが同じ場を示めていたことはこの点に於て考えさせられることである。このことは近世の自由主義が経済的市民社会の中から起つて来たことと対比して考える時示唆に富むものであるということが出来る。尚これについては古代の都市国家を述べたものではないがピユツヒヤ¹³⁾の都市を説明した次の文言は経済活動の持つ特性を示したものと見える。「近代都市を創り出したるもの、そは専制君主の命令にも非ず政治的軍事的の植民にも非ず……そは実に純社会的発展の深奥より発して国民的自由の基底の上に成長したりしもの……真に社会淘汰の事実に根拠を有するものである。蓋し此の社会淘汰によつて近代都市は国民がその精神的併びに経済的勢力に於て示したる最高のものを己の中に統合しているのである。……都市が有する驚嘆すべき牽引力の拠つて来る所以を探ぬるにそは実に都市が企業的経営及自由競争という地盤の上に立てるその経済制度によつて秀抜なる才能を抱ける者はその何人たるを論ぜずそれに最高の報償を与ふる戦場を開きつゝあるということに存するものと云はねばならぬのである」此の意味に於て人間の歴史の古き国家形態としてギリシヤ、ローマに「都市」の性格を帯びた国家が作られたということは偶然のことではない。都市と国家とが一体となつた社会形態とは経済と国家とが一体となつたことを意味してはいないであろうか。都市国家とは小型の分立した国家という単純なことを意味しているのではない。古代ギリシヤの詩人アルカイオス¹⁴⁾も「城壁とかその他の都市の土木施設がポリスなのではなく有能な人間がポリスである」といつている。自由を自覚した市民団の存在と活動が都市国家の本質的特徴であつたのである。ギリシヤ、ローマの都市国家が他の古代

(11) Ludwig Stein

(12) Friedrich Ernst Daniel Schleiermacher

(13) Karl Bucher Die Entstehung der Volkswirtschaft 権田保之助訳 402頁

(14) Alcaeus

国家と比べて人間生活の理想とされるのはそのためである。アゴラから発する国家への否定の行動がアクロポリスに向けられなかつたならば又アクロポリスから出づる社会経済への規制の力がアゴラに加えられなかつたらアテナイの繁栄はなかつたであろう。アリストテレスが「国家は家族及村落の連合体であつて完全なかつ自足的な生活即ち私のいう完全で名誉ある生活を営むことを目的とするものである」とか又「ポリスとは人々が有無相通ずるために集つた所である」と述べたり有名なプラトンの理想国家論があつたりするのは理想化された表現ではあるが当時のポリスのすぐれた状態を物語るものである。然し人間の歴史の発展は社会生活の形態をそのような都市国家にいつまでも止めては置かなかつた。経済生活が単純である間は小規模な都市国家で一応の秩序の安定は維持することが出来た。即ち国家の政治的動きと経済の発展とは矛盾対立を起さなかつたのである。が然し先きにも引用したコオールの言葉の通り「その環境と位置とを変化し改良しようとする」民族の本能は非常に不安定な波動となつて古代史を特徴づけていたのである。ペエイチホツトは古代を国家建設時代と呼んでいる⁽¹⁵⁾。しかも国家の領土拡張に狂奔した時代であつたのである。その大きな波動に打ち勝つには自給自足的分立国家では不適當となつて来た。ギリシヤについて見ると海外貿易が盛んとなりエーゲ海を中心とする一帯に経済活動の範囲が広まつたのである。かくして同じ動向にあつた他民族のペルシヤとの衝突が起つたのである。これを画期として都市国家は脱皮の過程に入つたということが出来る。デロス同盟等都市国家間に同盟が作られたのはすでに都市国家の小規模な調和が意味を持たなくなつたことをあらわしている。また経済社会を規制する国家の力も乱れて経済構造の中にも種々の不調和の現象が見られるようになって来た。農村と都市の不均衡、貧富の懸隔、失業者の増大等がそれである。また人間の精神生活も拡充されてポリスの与える秩序と調和が狭小に感じられこれに反対する動きも見られて来た。ヘレニズムの国家が世界国家を標榜したがその時代の人間には現代の如き一定範囲の世界が現実的に意識されたのでは勿論ない。世界とはポリスを超越することを意図しその政治的否定を意味したのである。ストア派やエピクロス派の哲学の持つディオニシ的な傾向はポリスの本質である合理性と規律性の持つアポロンのものに反対して主張されたものである。秩序と調和より寧ろ混沌と神祕を主張したのはその表現である。この様に経済社会の内外より起つた人間歴史の発展の動向は幾多の問題を顕わにしたのである。そして更に領土の拡大を為し得てもこの問題は、エ

チプト、バビロニヤ、ペルシヤ、ローマ等の国家に於ても容易には解決され得なかつたのである。このことは帝政ローマ末期の経済情勢によくあらわれている。貨幣の悪鑄、物価体系の混乱、非生産的投機の流行等がそれである。これらの経済社会の無秩序を救済するためにはオリエンタ的な専制的統制策が夫々の国家に於て実施されたのである。然しそれは抜本的なものではなく一時的な弥縫に過ぎなかつた。経済社会の基盤ともいふ可き安定した秩序の枠が古代に於ては固定しないで絶えず動揺していたのである。またその生産力も未だ脆弱であつたので経済の動きは微小であつて政治的勢力の一方的な規制のみが強く実施されたのである。従つて経済社会の立場にあつてそれに適合した施策というものは望み得なかつたのである。国家成立の当初に於ては一応の均衡と発展との雛型を示し得た古代国家も次第に人類各民族の接触の規模が拡大するに従つて国家の持つ本質的な課題をもう一度最初から解決して行かなければならなかつたのである。その契機を与えたのが民族の大移動であつたということが出来る。この外来民族のほとんどが未開勇猛の異民族であつたし、ヨーロッパ世界の統治に當つていたローマ帝国も崩壊したので社会の秩序はみだれ不安動揺の状態に陥つたのである。これに対して古代文化は為すところなく衰微敗退せざるを得なかつた。この云わば「暗み」の世を経て次第に成立して行つた社会構造は如何にあつたか。即ち封建制国家成立の社会状態が国家と経済の次の問題とならなければならぬのである。

(15) Bagehot: State-making age